

## 「新型コロナウイルスに思うこと」

2020年05月01日

新型コロナウイルスが世界中に猛威を振るい、甚大な被害を与えている。1918年から1920年に「スペイン風邪」が流行し、少なく見積もって4800万人、多く見積もって1億人の命を奪った。百年前と現在では医療技術、制度が違うので比べられないだろうが、現在の新型コロナウイルスは、百万人単位の感染者が出て、十万人単位の死者が出ている。医療技術が遅れ、制度が整っていない発展途上国に蔓延したら、歯止めがかからないのではないか。私は、新型コロナに関し、一つの疑問と一つのやり切れない怒りを感じている。

疑問はPCR検査をなぜ広げないのかということである。PCR検査を受けるまでに、幾多の関門があり、そこに行き着くまでに、重症化し、死者も出ている。PCR検査をして、陽性者を早く洗い出し、隔離して、感染を抑えるべきではないか。多数のPCR検査をした場合、多数の感染者が出て、医療崩壊し、隔離する場所を確保できないからだとも聞かすが、検査をしなければ、感染は止まらないのではないか。外国では、日本と比べ、10倍以上の検査をし、感染者を隔離する場も作っている。日本の医療技術が外国に劣るとは思えないし、政府が隔離するホテルなどの場所を確保できないとは思えない。

私は、五輪パラリンピックの開催と中国の習近平氏の訪日を控え、感染者数を抑えたいために、PCR検査を渋ったのではないかと疑っている。両方とも延期が決まり、かなりPCR検査は増えたが、感染状況を正確に捉えられていないし、国民の不安は除かれていない。安倍政権の新型コロナに対する対応に不信感が募る。藤原辰史氏の「パンデミックを生きる指針—歴史研究のアプローチ」がネットで配信され、大きな関心が集っている。その中で現政権を、穏やかな言葉ながら手厳しく批判している。国家のリーダーが情報を隠すことなく提示してきたならば、データに基づいて構成員自身が行動を選ぶことができよう。データを改竄したり部下に改竄を指示したりせず、後世に残す文書を尊重し、歴史を重視する組織であれば、死ななくてもよい命を救えるかもしれない。自分の過ちを部下に押し付けて逃げ去るようなリーダーが中枢にいない国であれば、ウイルスとの戦いの最前線に立っている人たちの不安を最大限除去することもできよう。「有事」に役に立たない買い物やアメリカから強制されるのではなく、研究教育予算に税金を費やすことを使命と考える政府であれば、パンデミックに対しても、マイナスにはならない科学的政策を提言できるだろう。私は、藤原氏の言い分に納得できる。医療従事者は政府に忖度せず、正確な科学的データを提出してほしい。期待できないだろうが、政府は国民の痛みを寄り添い、命を守る政策を実行する信頼される組織になってほしい。今からでも遅くはない、PCR検査を多くして、感染の実態を把握し、命を守る手立てを作してほしい。

怒りを感じていることは、新型コロナに関して、いわれのない差別を生み出していることである。欧米では、中国から発したコロナなので、東洋人を見れば、差別と侮蔑の言葉を投げかける。日本においても、コロナ医療に携わる人々の子どもたちが「ばい菌」と言われ、疎外されている。ステイホームが求められ、在宅にストレスを感じ、家庭内暴力、子どもの虐待が頻発している。不安は怒りを生み出し、他に対して攻撃的になる。社会的弱者にどのように向き合っているかによって、社会の成熟度が現れる。命の尊厳を見失い、混乱が起こることを危惧する。新型コロナ騒動が、生きることに困難を覚えている人々と優しい関係を結び合う心を養い、そのような社会環境を作る機会として作用することを期待する。医療関係者を励ます人々の声や行動は涙が出るほど嬉しいことである。